

コロナ禍の感染対策に必要な新たな戦略とは

いま攻めの姿勢に大転換を 科学的知見に基づくと武器を持って

越智文雄（日本除菌連合会長・一社次亜塩素酸水溶液普及促進会議代表理事）

新型コロナウイルスの変異株が世界でパンデミックの再拡大をもたらす、日本の新規陽性者数もさる8月に過去のピークを軽々と超えた。コロナとの闘いが1年8カ月にも及ぶ中、ワクチン以外のさしたる武器もなく「さらなる人流の制限」を強いられる生活に閉塞感が高まる一方だ。こうした状況を新たな視点と攻めの姿勢で打開していくことと日本除菌連合の越智文雄会長は訴える。我が国は、実は「やれることをやっていない」のではないか――。

かくも長きにわたる不作為

1年と8カ月――。これだけの長い期間がありながらいまだに感染の経路も原因も判明していない。いままでの戦略の大前提は飛沫感染だったが、すでにエアロゾル感染と判明して久しい。新しい事実には、すみやかに新しい対策を取らなくてはならない。だが、ここに至ってもどのようなシチュエーションでどれだけのウイルスを吸引したらどういう症状になるのかという基礎研究がされていない。ウイルス対策の目安とすべき基本的な臨床試験をはじめ科学的、数量的目標値も、それを実現するための科学的な滅菌試験の結果も発表されていない。

エアロゾルと分かっても、いまだに手洗いとド

アノブ、テーブルを拭くためのアルコール以外の消毒、除菌資材も推奨されていない。いわんや方針の前提となるべき空間除菌という言葉自体が厚労省や専門家会議でタブー視されている。

厚労省は、海外でどんな研究が発表され、どんな最新製品が開発され、どんな消毒・除菌対策が取られているかを調査した形跡もない。全国の保健所が何百万件もの感染者と濃厚接触者の聞き取りを行ないながらも、そのデータベースから感染源の分析や感染確率の評価がいまだにされていない。この分析もなしに飲食業界が主犯格扱いされ、これまで多くの倒産、失業の犠牲者を出している。飲食店が感染の犯人であるという決めつけは何を根拠に始まったのだろうか。札幌市内の飲食店で従業員的生活を守るために営業も酒の提供も続

けている15の店舗を持つ企業グループでは、このパンデミックでひとりの感染者も発生させていないという。そもそも札幌市の過去1年間のクラスター発生数157件のうち飲食店がその発生源だった件数はたった7件だという（7月現在）。

それでは残りの150件はどこで発生したのか。感染源不明というが、ススキノのソープランドなどの性風俗店は休みなく昼から営業している。飛沫どころか体液交換感染しているはずの業態をなぜ規制の網や調査対象から外しているのか。飲食店を生贄にするのもいい加減にするべきである。

先述のように、今までの日本の感染対策は飛沫感染を前提としてきた。距離を取るのも、アクリル板も、マスクをするのも基本的に他人のくしゃみや咳を直接顔に浴びないためだけの対策である。

しかし、あのスーパーコンピュータ富岳の飛沫シミュレーションで、飛び散っているのが全てがウイルスかというと、あの無数の点中にあるコロナウイルスはたったの10個程度だと言う。

直接顔にかかったとしても10個程度のウイルスでは感染しない。では何回のクシャミならば感染するのか。この研究をしないまま1億3千万人が不潔恐怖症と感染ノイローゼになってしまっている。居酒屋で大声を出すと感染するというシミュレーションを富岳でつくることはできないのか。その中に何個のウイルスがあつてそれが居酒屋にいる間の2時間でどれだけ体内に取り込まれるのか。そのウイルス量と酔っ払いの免疫力のどちらが強いのか。

東京オリンピックの札幌でのマラソン競技では、沿道からの応援すら自粛しなさいとの通達が行政から出た。風の吹く屋外で声援を送ったからといって、その10個のウイルスはどこに飛んで行く

のだろうか。

1年と8カ月かかってやっとこういう事実がわかりはじめた。もしくは、こういう真実を話してもやっと批判されなくなった、ネットで炎上しなくなったと言ふべきなのかもしれない。

エアロゾル感染とは

いま第五波の感染がとどまるところを知らないのは、飛沫感染ではなく感染力の強い変異種の空気感染であるという根本的な感染原因の大転換がある。空気感染なら密閉した部屋の中でまだ発症が、発熱していない潜伏期間中の陽性者と長時間いれば、当然その人間の呼吸は同室者の肺の中にも取り込まれる。2メートル離れても意味はない。

振り返ると、今年の記録的猛暑の中で換気のために窓を開け放しにしていた家庭がどれだけあるだろう。日本中のほとんどの家庭では窓を締め切ったまま冷房を最大にしていたはずである。従来型のクーラーは換気をしないでウイルス混じりの空気を室内で攪拌し続ける。家庭内感染が全国で広がっているのは当然と言えよう。皮肉なことに、感染を抑えるため無観客を決めた政府の呼びかけは「オリンピックは自宅で家族とテレビで見ましょう」である。お父さんかお姉さんがどこかでもらってきたウイルスと一緒に家族でクーラーを全開にしてオリンピック観戦していたのである。今このパラリンピック期間に、自宅で蔓延した家庭内感染の子供たちやワクチンを接種をしたからと安心しているお年寄りが学校や施設でさらに

感染を広げているのではないのだろうか。職場の空気感染対策というのも今年の夏は全く取られなかった。空調を全開にしてもなおかつ室温が下がらないほどの猛暑の中で窓を開けたまま仕事をした職場がどれだけあっただろうか。

最新のインテリジェントビルや建築物衛生法をクリアしている空調計画換気がなされているビルは安心だが、昭和、平成のビルには建築時点では法規制をクリアしていても、その後のメンテナンスをしないでいると当初の換気空調の能力は当然落ちていく。換気性能が落ちフィルターの交換もしないまま目詰まりしているならば、そのビルはコンクリートとガラスで封印された密室に等しい。その中で何百、何千人の人間が1日8時間呼吸をしている。その何千人の中に潜伏期間中のウイルスキャリアが何人紛れ込んでいるか。その人があなたの隣に座る同僚でなくても、エレベーターもしくはトイレ、食堂、休憩室、脱衣所でご一緒しているかもしれない。職場でのロシアンルーレットである。

繰り返すが、飛沫感染ではないことを前提にすれば今までの対策は空気感染にほとんど無意味である。入口で熱を測っても発熱していない潜伏者が入ってくる。手洗いをしてもエアロゾルの空気感染を防ぐことにはならない。2mのソーシャルディスタンスをとってもその部屋が密室であればウイルスの混じった空気を吸わざるを得ない。つまり換気以外は手の打ちようがないのである。猛暑の今夏は、全国民が換気をしていない室内で過



コロナ対策の大転換を説く越智氏

